

名所解説

1 菩提寺山

金津集落の南東を線取るように連なっている標高248mの丘陵地。9世紀初め空海(弘法大師)が会津惠日寺から村松の水戸野を経て由緒、この山に差し掛かり、黄言密教普及のために一寺を建立し、菩提寺と名付け弟子の宗上人を残したという。時代は下って平安末期、源平の戦いの折衷で越後に連れてきた平惟茂を追って、側室のお菊の方がこの山に差し掛かった。そこで平惟茂の方を知らされ、香巻を手向けた地が「花立」とい、菊の方の在を天沢沢という。ここから五泉に抜ける山道は生活道路でもあり、仏路とも呼ばれ「馬頭観音」が安置されている。



菩提寺山頂付近の「馬頭観音」

2 白玉の滝

かつては山岳修行の地で、13世紀初頭から知られていたという。上流には落差15mの雄滝、下流には落差7mの雌滝がある。毎年7月初めに地元の人たちで滝開きを行い、滝打たれの行事を行っている。周囲の静寂を打ち破るかのよう絶えることなく落ち続けるこの滝は、夏でも肌寒さを感じさせる納涼の地として人気がある。また、厳冬の2月には民間の有志による滝行も行われている。



3 金津城跡

鎌倉時代初期に「金津保」地頭金津小二郎資義が築いたとされている。「金津城跡」の碑が建っている地は標高180mほどの「羽黒立」と呼ばれている台地上にあり、古くから「殿上」とも呼ばれていた所である。



4 堀出神社

「金津城跡」にあるように、鎌倉時代初期に「金津保」地頭金津小二郎資義が築城のために地面を掘っていたところ、「黒い水」とともに金色に輝く二体の御神像が出てきたという。これを伊邪那岐命、伊邪那美命として祠を建てて祀ったのが堀出神社だという。当時は別の場所にあったらしい。



5 開基碑

「金津城跡」堀出神社」の項と同じく、金津小二郎資義の築城工事の際に地下から御神像と「黒い水」が出てきたという。これが原油であり原油が湧き出した元という意味である。開基碑の碑は、昭和33(1958)年に帝国石油㈱によって建てられたものである。



6 原油を含む地層

付近に原油を含む地層は何箇所かあるが、もっともはっきり分かる地層。路頭の砂岩層に原油が認められ、近づくにつれて原油の匂いがする。この原油を含む層を「オイルサンド」とい、この地層は新潟県北蒲原市に見られ、「金津層」と呼んでいる。



7-1 石油の世界館

かつて隆盛を極めた石油産業歴史を物語る各種資料、土絵掘り模型、金津油田の歴史などの展示物が陳列されている。無料で開放している。



7-2 ブルホイールと3号井

中野邸美術館のすぐ前にある。ブルホイールというのは、原油をくみ上げるポンプに巻いてある皮を張り替える時に使う、重いピストンを巻き上げる装置。



7-3 ポンピングパワー

各油井に接続されているシャックライン(引張り線)に往復運動を伝える装置で、金津油田では16台のポンピングパワーで140箇所のポンプを動かしていたという。菩提寺山登山道の途中から少し入ったところにあるポンピングパワー(写真は明治42(1909)年にアメリカから導入された「ナショナルポンピングパワー1号機」という。



7-4 C38号井

菩提寺登山道を登るとすぐ見える石油井戸。「筒式機械掘」というくみ、明治42(1909)年にこれを使って213m掘り下げたという。現在は手回しのハンドルをつけて、これを回すとピストンが上下して原油汲み出のしくみがわかる体験装置となっている。



7-5 里山ビジターセンター

石油の里のエリアに建築された施設で、菩提寺山の登山者や里山を活用する個人や団体への情報を発信したり、準備や休息もできるようにしている。ここは平成元(1989)年に「観光物産館」として造られたものを、物産だけではなく記の他に研修も出来る施設として平成27(2015)年にリニューアルオープンしたものである。



8 中野邸美術館

「日本の石油王」と呼ばれた故中野實一翁の邸宅及び庭園を有料で公開している。中野邸内部の美術館には、中野實一翁及びその子史太郎所蔵の古書や骨董類が陳列されている。また庭園は2000本のおもじが植えられていて、春の新緑はもちろん、とわけ秋の燃えるような紅葉は見ものである。



9 青木の墓(高岩寺)

金津の高岩寺(高岩寺)の裏手の墓地にある「青木の墓」。古くから伝説じみた話として伝わっている。しかしこれは青木兵右衛門という実在した人の墓であり、この兵右衛門は江戸時代、赤坂(現在の白根近辺)16か村の大庄屋であった。この16か村のほとんどは、彼が新発田藩から許可を得て新田として開発した村々であった。兵右衛門は熱心な新田開発に努める反面、人々の恨みを買うような行爲もしばしば見られ、また不正を働いたがごとく新発田藩により所払いを受けたという。この墓に刀傷が残っていることから、伝説じみた話に仕立てられたのであろうが、それはまた人々の恨みを買った結果であることも意味しているという。



10 新潟県埋蔵文化財センター

県立の施設で、八幡山山麓に建てられているが、特に八幡山遺跡の発掘物が陳列されているということではなく、県内各地の発掘の成果が集められている。毎年行われている各地の発掘の報告書はここで入手できる。



11 古津八幡山遺跡

昭和62(1987)年の磐越自動車道の土とり計画が浮上した折に、確認調査が実施されて発掘された弥生時代の集落跡と推定される遺跡である。標高約50mの丘陵上に構築されており、周囲には環濠が張り巡らされていることから高地性環濠集落跡と呼ばれている。これまでの発掘調査で50基の竪穴住居跡が確認されている。平成17(2005)年に国の史跡に指定された。現在、7棟の竪穴住居が復元され、方形周溝墓、前方後円墳も復元されている。



12 古津八幡山古墳

平成23(2011)年～平成25(2013)年の3年間にわたる史跡整備のための確認調査により、大きな円墳が築かれたことが確認された。この円墳は直径60mあり、県内最大級の古墳であることも確定した。平成23(2011)年に八幡山遺跡に続いて国の史跡として追加指定されている。この古墳を築いた人々は、八幡山の集落を放棄したのち、低地に移住した人達の子孫ではないかと推定され、その新しい集落が「角戸遺跡」ではないかといわれている。



13 史跡古津八幡山弥生の丘展示館

八幡山古墳のある古津八幡山の麓に造られた八幡山遺跡と古墳に関する展示や体験ができる施設で、常設展示として500点の八幡山遺跡から出土した、旧石器時代から平安時代にかけての長大な発掘物が展示されている。また時期により発掘体験、宿泊体験、企画展等の多彩な企画を行って人気がある。



14 新潟県立植物園

平成10(1998)年に開園した熱帯植物園を含む立植物園。20haを超える広大な園内には、10万株を超える植物が植栽されている。園内は「熱帯植物ドーム」「花と緑のステージ」の3つの観賞温室が造られていて、四季折々の樹木や花を求めて、県内外から多くの人が訪れている。(有料)



15 朝鮮医学界に貢献した小川蕃の墓

小川 蕃は、明治24(1891)年古津に生まれた。父は江戸時代古津村庄屋を務め、後に津島村戸長も務めた小川 軍輔、その五男として生まれた。東京帝大医学部卒業後、朝鮮総督府医官として京城に赴任。その後欧米にも留学。昭和2(1927)年京城帝大医学部助教授となったが手塚の執刀中に脳溢血で倒れ、48歳の生涯を終えた。八幡山の麓に建てられた墓は、小川外科教室の教え子たちが朝鮮から御影石を取りよせて造ったものだといふ。



16 普談寺観音堂

普談寺は真言宗の古刹であり京都智積院の末寺である。寺頭に二重門があり、両陣の金剛力士像が祀られている。この二重門に続く高い石段の上に観音堂があり、この観音様は越後33観音堂場の30観札所となっている。古くから「朝日の観音様」として知られ、8月10日の観音様のお祭りでは、かつては身動きも出来ないほどの参拝客や参道両側の夜店で賑わっていた。



17 酒井憲次郎の碑(広大寺)

古津広大寺境内に一際高くそびえる碑が酒井憲次郎の碑である。酒井憲次郎は明治36(1903)年古津に生まれ、陸軍少佐飛行場の訓練士となり、1等飛行操縦士の資格を取得した。その後北海道の小樽新聞社に就職し、この時に千歳空港のもとになる千歳飛行機着陸場の造成に関わった功績により、平成14(2002)年に千歳空港広場にブロンズ像が建立されている。その後朝日新聞社に移り、昭和7(1932)年満洲国の成立式典の取材をした帰途、日本海沖に遭難し30歳の生涯を終えた。鳥取県の八橋の城山に殉難碑が建てられている。広大寺の碑は昭和8(1933)年、舟トミによって建立されたもので、碑陰の文に憲次郎の略歴が記されている。



18 農協の石倉庫

太平洋戦争終戦後の昭和17(1942)年、戦時下の食糧管理法により米が国家管理となり、配給制が敷かれたが、この時当分の金津信用組合の倉庫が敷かれたが、この時当分の金津信用組合の倉庫として建てられた。昭和22(1947)年、金津農協に移管され、今日に至っている。土台や壁面に野石を用い、湿気や強風にも耐えうる建物として、近隣でも評判の建物であった。



19 本多家雙芳碑

朝日の本多家元は尾張藩の藩士であったという。江戸後期の天保年間に本田文明、号を笑翁という人が医学を学び、この地で医業を始め、同時に実学館と、いう私塾を開いて多くの子弟を学問を教えた。その子一郎、号を敬齋と言ったが、この人も医学を学び父とともに医業に従事した。明治元(1868)年、医学者を育成するため「仁壽館」を開いたが、翌年出張先の水原で病に倒れ、そのまます世した。さらにその翌年父文明もなくなり、実学館も仁壽館も閉鎖された。この二人の巨匠(雙芳)を失った子弟の中野實一や田村佐志治が本多家の邸内にこの碑を建てた。



20 舟戸遺跡

これは新津丘陵西端の旧大通川の自然堤防上に立地する古くは古墳時代の集落跡であることが確認されている。昭和20年代の耕地整理の際に見えられ、平成5(1993)年の第二次調査以来20回を超える調査が行われている。この遺跡は、八幡山に古墳を築いた人々の集落跡と考えられ、竪穴住居や坑列、大量の土器が発掘されている。平成27(2015)年、第25次となる調査が行われ、約40基の遺構と弥生土器が発掘された。



21 お井戸の地蔵

西島集落のやや東側にある小さな池にまつ活の地蔵である。この池には陸の印のあるお地藏様が祀られていて、その昔、日照り続きで村人たちが困っていたが、梅雨時になっても雨が降らず、このままだと田畑の作物が枯れそうになった。村人たちはこのお地藏様に一心に願いをし、すると3日後に雨が降り、田畑の作物も助かったというのである。それ以来この池は大切に守られているが、伝説や民話の類と思われることが、実際に特定できる場所として残っている不思議な池である。



22 妙蓮寺と山門

妙蓮寺は鎌倉時代正応元(1288)年に、日蓮の法孫、日印によって開かれた。山門は文政9(1826)年、26世日惑の時に菅澤村の伊藤と左衛門が願主となり建造された。様式は三間三戸二重門とい、江戸後期の代表的造りで、新発田の宝光寺、三条の本成寺とともに蒲原三大山門として有名である。昭和53(1978)年に旧新津市の文化財に指定されている。また妙蓮寺は創建当初幕府の庇護を受け、また江戸時代には新発田藩との繋がりも強かった。



23 東島城跡

東島集落の南東端の標高107mの小高い丘に位置する。中世の要害跡と考えられる城跡跡で、山頂の本丸に続いてその下方に二の丸が構築されていたものと思われる。また西側の山麓には防制用の曲輪である根ノ原の跡も確認されている。さらに本丸の東側には深くえぐられた空堀が認められる。平成16(2004)年に旧新津市が発行した「新津の文化財」には「新津氏が有事の際には備え要と恐れられていた。昭和60(1985)年に旧新津市教育委員会が新津市にとって中世の歴史を物語る唯一の貴重な存在として市の文化財に指定している。



24 桜清水

鎌倉時代の弘安元(1278)年、中村という村で神社を建てるために鑿土用の土を削り取ってできたこと、きれいな清水が湧き出したという、村人たちはこれを「桜清水」と呼んで大事にしていたが、近くに大きな桜の木があったところから、いつの間にか「桜清水」と呼ばれるようになったという。また一説には、妙蓮寺の園地である日土上人が発見したともいわれているが、真偽は不明である。今でもこの水を汲みに来る人が後を絶たない。



25 旧中島小学校跡

金津地域に初めて建築された本格的な小学校がこの中村の小学校であった。明治(1872)年の学制の発布とあわせて西島の徳徳寺で最初の学校が開校した。その後明治11(1878)年に建築され、当時津島小学校の本校として田家から鎌倉新田までの広大な学区を抱えた学校であった。その後長島と中村が津島村から分離独立して中島村を作ったので、この校舎は中島小学校となった。さらに明治34(1901)年中島村は津島村と合併し、新しく「金津村」が誕生した。明治43(1910)年、中島小学校は閉鎖され、金津尋常高等小学校に統合された。石段を登った所にある煉瓦の赤門は当時のままである。



26 程島館跡

「新津城」(現新津自動車学校の地)にあったといわれている「東島城」と一体のものとして建造され、おそろく東島城の控えの層階として建てられたものと推定されている。平成16(2004)年に旧新津市が発行した「新津の文化財」には、「一辺ほぼ110mに及び、周囲に濠と土塁を巡らせた」とあるが、現在は田の小さな公園の一角に標柱が建てられているのみである。



27 山居稲荷

もともと島の妙蓮寺の境内に八幡宮ともにも安置されていた稲荷神社が、明治の神仏分離政策によって分離移設された。当時妙蓮寺の総代を務めていた西島の佐藤家の所有地であった東島の現在地に安置されたものである。以後代々佐藤家がこの祠を管理し、毎年春秋2回の祭礼を行っている。なお、昭和8(1933)年に当時の金津尋常高等小学校発行の「郷土趣味読本」に「おさんぎつね」の話が載っていて、その中に「おさん」という名の狐を祀った祠が建てられたという一節があるが、これらの関係は不明である。さらにこの祠のある場所は東島の区域で「山居」と言われているが、朝日側では「山境」と呼んでいる。

